

アルトホーフのビュルガー伝 (1)

糟谷恵次 訳

*Einige Nachrichten von den vornehmsten
Lebensumständen Gottfried August Bürger's.*

Übersetzt von Keiji KASUYA

はじめに

ここに訳出するビュルガー伝は、1798年ゲッティンゲンのヨーハン・クリスチャン・ディーテリヒ社から刊行された、詩人に関する初の本格的な伝記で、著者は詩人の友人でゲッティンゲン大学医学部教授を勤めた医師ルートヴィヒ・クリストフ・アルトホーフである。この伝記はビュルガー研究に際して欠くことのできない基礎的資料として評価されている。訳出にあたっては初版単行本を用い、同時に1802年刊行の4巻本全集に採録されたテキストも参照した(注)。

なお今回ここに訳出したのは、詩人ビュルガーが『レノーレ』の作者として名望を世に広めたあと、『ゲッティンゲン詩神年鑑』の編集にたずさわり、初の自選詩集を刊行する1778年当時までの記述である。

* * *

かつてビュルガーは次のように書き記した。
「私は自分の詩作品と生涯のいくつかの出来事によって祖国ではかなり一般に知られる名声を得た。それゆえ自分の人生が記されずに過ぎることはないであろうと思う。なぜなら、私の作品と比べれば一般にも理解されず好ましくもない作品を書いた他の多くの詩人たちより、この私がないがしろにされるわけがないからである。ところでしかし、そのような報告がいかに内容乏しく不完全で誤謬多きものかを私はこれまでに見てきた。それも傍目で見てもすぐに分かるような事柄においてすらそう思われることをいく

つも目にしてきた。精神や心情のさまざまな特徴を描くに当たってそのようなことがあつてはならない。そうしたものを描くに際しては、それを所有している人以外、すなわち、途切れなく長い交際を通じて存分に自己の意見を述べ伝えてきた友人以外には、誰一人忠実な肖像を描くことは不可能なのだ。将来、私の人生が絵空事として描かれないために、また私以外の誰も私自身と私の芸術を描かないように、この仕事をすすんで自分で引き受けることを私は心に決めている。」

善良なビュルガーがもしもこの決意を実行してくれていたなら、この書の筆者たる私から大いなる困惑は取り払われていたであろう。

私は自分が伝記を書くことにそれほど適してはいないということをよく承知している。また、ビュルガーについて言えることを書き留めるなどということを、もしも繰り返し執拗に迫られなかったら、また詩人の晩年の十年間にきわめて親しく彼と交際したことが理由で、いかばかりかの義務としてそれを感じなかったなら、このようなことを私はきっと企てはしなかったろう。というのも、ビュルガーの性格と彼のさまざまな特質について他の人々よりいくらか正確な知識を持っているかもしれないからといって、ビュルガー自身が上で述べたような、信頼に足る友人にやむなく期待した能力を私が有しているわけでもなく、また読者に楽しみと満足を与えるほどの伝達の能力を私が備えているわけでもないからである。さらにつけ加えて言えば、

開業医という落ち着きのない職業は、呼び出される心配もせずに、かくも異質な対象の執筆に心置きなく専心しうる猶予をめったに一時間とは与えてはくれないのである。

ビュルガーの生涯の大事な出来事に関してさらに言えば、そのうちで私が直接知っているのは最期の十年間のことに過ぎない。それよりも以前のことにについては彼の口から聞いてかなりのことは知っているが、そのほかの多くは彼の旧友たちから彼の死後伝え聞いたものである。しかし、書き留めて保存する価値のあるかなりの事柄を私がまったく知らなかったり、あるいはそれを知っていても私の友人の付けたりと言及からに過ぎなかったりで、それをふたたび物語るには十分ではないこともある。生涯の悲しみ深い最期の数年に彼が経験せざるをえなかった事柄に関してならば、たしかに私はあれこれ物語ることもできよう。また、それはおそらく大いなる関心をもって読まれましょう。しかし、まずいことに、こうした事柄は、ある種の思いやりを損なわずに、またさらに存命中の人々を世間に晒すことなく読者の前でうまく物語ることなどできようはずもない。だがしかし、まさにこうした話こそ、私が彼の性格について語りうるであろうすべてより、ビュルガーという人間をたくみに描写するであろうが。

芸術を愛しビュルガーの文芸を好む者たちは、疑いもなく彼の詩的教養とアポロに身を捧げた聖別のありさまをもっと詳しく知りたいと思うだろう。しかしこのことについて私のような俗人にはまったく何も言うことはできない。この小伝の中でこれについて言えることがあるとすれば、それはビュルガーのもっとも気高く親交の篤い友のひとりであったメルドルフの予算顧問官ボイエ氏のお蔭である。氏はそれにふさわしいいくつかの情報でたいへん快く私を支援してくれたばかりでなく、後述する部分の草案を訂正し補足するために目を通してくれることも許可してくれた。告白するが、もしもこのような援助がなかったなら、とても大変な、私の力には不似合いなかかる企てに係わり合うことなどなかったであろう。

このように率直に言明した後なら、批評の裁

きの座で公正な情けを期待してもよいだろう。また、これから述べる伝記的なスケッチが批評をもくろんで作られた芸術作品としてではなく、しばらくの間私が近くで眺める機会を得た対象の輪郭のイメージを他者に与える試み、それもまったく不慣れな手でなされた試みとして眺められることを願いまた望んでもよいだろう。

党派的な称賛の嫌疑をかけられることなく、かくも高く称賛されまた同様に誤認されたこの詩人の心情と道徳的性格について、判断を誤りなく正すことにもしも成功するなら、この仕事に払った努力に対し、私は十分に報われると思う次第である。

* * *

われらが詩人の父、ヨーハン・ゴットフリート・ビュルガーは、ポムスフェルデに生まれた。その父親は当地のパッセブルク領の小作人であった。ヨーハンは1726年から1729年までハレ大学で学び、1724年ヴォルマースヴェンデの牧師になり、さらに同年アシャースレーベンの農場主ヤーコプ・フィリップ・パウアーの一人娘ゲルトルート・エリーザベトと結婚した。1748年アシャースレーベンのヴェストオルフのアベル牧師の助手となった彼は、1763年に牧師の職に就いたが、早くも1765年に赤痢で亡くなった。彼の妻は1718年3月16日アシャースレーベんで生まれ、夫が亡くなってから10年後の1775年11月24日に当地で没した。5人の子供の内、彼女の死後まだ存命であった者は次の3人だけである。

1. ヘンリエッテ・フィリピーネ。エールツ山脈のレスニッツ在住の宗教監督官ドクトル・エースフェルト氏に嫁ぐ。
2. われらがゴットフリート・アウグスト
3. フリーデリケ・フィリピーネ・ルイーゼ。

現在、ヴァイセンドルフ近郊ランゲンドルフ在住の修道会総代理人ミュルナー氏の妻。

われらが詩人は、ハルバーシュタット侯爵領の男爵アッセンブルクの領地ファルケンシュタインのヴォルマースヴェンデに生まれた。それも、彼みずからの話によると、その年の最初の時間に、古い風習にしたがって教会の塔から唱えられる新年の祝いの歌声につつまれて生まれた

という。

幼少時代について彼が語ったところによれば、両親は彼に多大な期待はまったくかけず、どうしてわが子は心も軀も成長がかくものろいのかと思い、むしろ彼を愚鈍な少年と決めつけていたようである。しかし、そうこうするうちに彼はとても早くドイツ語の読み書きを習熟した。しばしば彼は確信をもって言ったが、三歳の時の多くの事柄をまだとても生き生きと思い出すが、まだ完全には読み書きができなかった時のことはもう分からないという。明らかにおそらくこれは彼の記憶の誤りであろう。なぜなら、三歳ですでに完全に読み書きできたような子供なら、間違いなく周囲の注目と驚嘆の念を惹き起こしたであろうし、少なくとも誰からも愚鈍な少年とは見なされなかったであろうからだ。さらにビュルガーは確信をもってこう述べた。成人に至るまでのその後の人生の何らかの他の知識と同様に、これらの技能もたいした努力や骨折りを要しなかった。また、教師達や書物から学んだことはとても僅かであった。それというの、授業中はいつも自分には注意力が欠けており、それ以外の時は一冊の本をじっくり読み通す辛抱が欠けていたからである。そして彼は、自分の知識の予備倉庫に一瞥を加える、といつも、がらくたの一切合切がどうやってまたどこから中へ入ってくるのか、しばしば内心不思議に思わざるをえなかった。その大部分は折りにふれてここかしこで自ずといわば身についたのだろう、と。

十歳になるまで彼は読み書き以外には何も学ばなかった。しかし聖書と賛美歌で読んだことはきわめて容易に記憶にとどめた。好きだったのは主として詩篇と預言書であり、もっとも愛好したのはヨハネ黙示録であった。賛美歌集からも彼は、何度か読んだことのあった歌をたくさん暗記した。好きな歌は、〈Eine feste Burg ist unser Gott u.s.w.〉や、〈O Ewigkeit, du Donnerwort u.s.w.〉や〈Es ist gewisslich an der Zeit u.s.w.〉そして、〈Du, o schönes Weltgebäude u.s.w.〉で始まる歌であった。死の直前にもまだ彼は、それらの歌の一番最初のものが彼を高揚したその感激を思い出したし、

〈Es ist gewisslich an der Zeit u.s.w.〉という歌の数節には、彼が言ったように、後には止んでしまった彼の心の琴線がすでにその頃まったく薄ぼんやりとではあるが響いていたそう。

すでに十歳の少年の時にビュルガーは時折り人気ない場所をさがした。彼がとりわけ好きだったのは、戸外の緑の、わずかな藪で覆われた丘で、そこにある周囲の藪や灌木やあざみのひとつひとつに彼は生氣を感じとった。そうした寂しい場所で、あるいは昼と夜を分かつ黄昏時に、また暗い森の中で、しばしばわれわれを襲う戦慄が、彼にはきわめて好ましく心ゆする感覚を惹き起こしたのである。

すでにこうした傾向が、想像力あふれる特殊な気分と詩的な素質を言い当てているかのようと思われる。(中略)ところで、これらの詩句の最大の功績は明らかに、韻律の点で完全に正確であることであろう。大人になっても彼はしばしば自慢げに、このことに関してすでに子供の頃に何人もの器用な大人達を凌駕していた、と言った。ビュルガーはこうした一切のことをすでに少年時代の最初期に、いわば天性の才能で聞き取り感じ取ったのである。何が正しく何が正しくないのかを彼は知っていたし、また彼の表現によれば、それは首を賭けてもよいほどであった。しかし彼にはそれがなぜなのかは分らなかった。

それにもかかわらずこの文学少年はいつまでたってもラテン語を学ぼうともしなかったし学ぶこともできなかった。彼にはドナトゥス・ラテン語教本が与えられた。しかし彼は、どんなに打たれても、また自分からどんなに努力しても、讃美歌集を苦もなくそっくり暗記できたという言葉のわりには、2年たった後でも簡単な語の格変化さえできなかった。

ビュルガーの父は、当時の学び方でいろいろな知識を備え持った人で、同時に善良な、尊敬に足る人物であった。しかし彼は平穏な快適さを愛し、パイプ煙草をたいへんに好んだので、息子の勉強にひとたび15分をさこうとする時にはきまって、わが友人の言によれば、まずは一服の助走をつけないければ始まらなかった。彼の妻はたぐいまれな精神の素質の持ち主であった

が、読み書きの教養には欠けていた。ビュルガーの弁によれば、ふさわしい教養さえあれば、彼の母親は彼女の一門の中でもっとも著名な女性になっていたであろうとのことであった。ただし彼は幾度となく彼女の道徳的性格のさまざまな傾向を強く否定する発言をしていたのはあるが。それにもかかわらず彼は、母からは精神のいくつかの素質を、また父からは彼の道徳的性格との多大なる一致を受け継いだと思っていた。

父親があまり息子の相手をしてやらなかったもので、それだけ母親は息子のラテン語の宿題に飽きず耳を貸すことがしばしばであった。しかしそれでもラテン語が頭に入らなかったため、少年は近隣の牧師の子供達の所へやられた。不運なことに牧師の子供達はわれらがビュルガーよりもすではるかに勉学が進んでいて、教師がその子達にヴェルギリウスを説明している間、格変化を学ぶためにビュルガーにはラングの文法が手渡されたのであった。しかし、文法に身を入れなければならなかった彼はそれにもかかわらず、ヴェルギリウスの説明の途中でこぼれ落ちてくる詩的な言葉につねに精神と耳を集中させ、この詩句のかけらを貪欲に受けとめたのであった。その結果、彼は覚えるべき格変化を学ばず、覚えの悪い、勉学には向かない子供と見なされることになった。(中略)

その後まもなくしてビュルガーは1760年にアシャースレーベンの祖父のもとに送られ、その地の市立学校に通うようになった。学校長はゲオルク・ヴィルヘルム・アウエルバハであった。おそらく片手間にわずかばかりのラテン語を学んだビュルガーは、あらゆる詩的なものに対する愛着を持ち続け、今やすすんで以前にまして大きな試みに手を染めるほどになっていた。数年後に完成された8詩行17節の断篇がまだ現存している。詩の表題は、「ゴットフリート・アウグスト・ビュルガー描くところの、1764年1月4日と4月1日アシャースレーベンの大火」。この作品は少なくとも脚韻と長短韻律の正確さの点で、先ほど賞賛されたような功績を有している。この作品がさらに他の功績を有するのか、またこの著者がその後成し遂げたことをすでに

いかばかりかでも予感させるかどうかについては、あえて評価はくさない。いずれにせよ、宗教的感情に満たされた作品である。

詩の他のジャンルにおいても若きビュルガーはすでに当時さまざまな試みを行った。しかし、それらの一連の作品は少なくとも彼にとってはそう出来の良いものではなかった。芸術批評家達の判断によれば、もしも彼が、後述するこれらの一連の作品によって永久にこのジャンルのその後の試作に恐れをなしたにしても、芸術上の損失は大きくはなかったろうと言われる。ひょっとすると彼は、自分に悪意を抱くかなりの者達がその後の晩年の数年間に自分にしようとしていたかもしれないことについていまだ先入観を持っていたのかもしれない。しかし本題に入ろう。彼はかつてあるプリーマの生徒の腹立たしくも思える巨大なバックウィグ(袋かつら)について一篇のエピグラムをものしたことがあった。それがその御人の気に触り、校内で髪をつかみ合いとなった。校長のアウエルバハがこれにけりをつけた。調査の末、彼はその警句の作者をひどく手荒く殴って罰した。ビュルガーの祖父は校長に訴え、孫に対するそのあまりにきびしい罰の償いを要求した。この事件がきっかけとなり、1762年ビュルガーは祖父のもとからハレの大学予備学校に移された。

ここでも彼は時折り悪ふざけのいたずらをした。そのため多分いくらかの折かんを受けたであろうが、そうしたことには悪意や他人の不幸を喜ぶ気持ちなどはみじんもみとめられなかった。彼が好きだったのは、ヴォルフエンビュッテルの現教授で当時は予備学校の教師であったライステ氏が自分のクラスの生徒達と行っていた詩句を作る練習であった。すなわちまず最初にすぐれたドイツ詩人達の詩句が言葉の順序を置き換えて生徒達に与えられ、それらの言葉をふたたび韻律的に正しい順序に並び替えるのである。その後で生徒らには良い詩の内容だけが教えられ、その内容を詩的に作り上げるのだが、出来上がったものは名前をふせた手本にしたがって改善された。まさに同じ時この授業を楽しく受けたひとりに、現枢密顧問官フォン・ゲッキング氏がいた。彼らの教師の弁によれば、両

者にはすでに当時文学に対する異なった素質が見受けられ、ビュルガーの場合にははやくも民衆文学への特別な愛好がはっきりと表れていたそうである。

1764年彼は、祖父の意志にしたがって、神学を学ぶためにハレの大学に移った。他のものなら何でも選んだであろうが、神学の勉強はなるほど彼の傾向にはまったく反していた。その後まもなく起こった父の死後すっかり世話になっていたこの祖父は孫の彼が聖職者になることを望んでいた。そんなわけで実際に、ビュルガーはハレ近郊のある村の教会で一度説教したこともある。

重要な支援者で友人となったのは枢密顧問官のクロッツであった。幸運と永続的な名声によってあまりに早く著名になったこの男の性格と習慣を知る者は、彼との頻繁で親密な交際が活発な想像力と旺盛な感性をもつビュルガーのような若者の道徳性に多大な影響が及ぼされたにちがいないことをきわめて容易に理解できるだろう。そこで私が主張したいのは、詩人の生活と彼の詩作にその後ずっとこの影響が著しく尾を引いたということである。

だがビュルガーはこの友人から数多くの有益なことも学ぶことができた。それは特に当時彼がもっとも好んで関わっていた古代文学の分野において顕著であった。モイセルが議長を務める中で彼は博士論文 *De Lucani Pharsalia* を弁じ賛意を得た。しかし全般的に彼はなんら適切な計画も持たず勉学を続け、教師で友人のあの男にひき連れられて騒ぎ通すことも少なくなかった。そこでついに祖父は、孫が自分の願いを忘れ将来の職にふさわしからぬ暮らしぶりをしていることを聞き知り、怒って彼をハレに呼び戻した。しかしこの愛する孫は、祖父の怒りをやわらげることに成功したに違いない。なぜなら祖父は、1768年の復活祭にゲッティンゲンに行くことを許したばかりでなく、孫の傾向にはあまり適していない神学を法学に替えることさえ許可したからである。

ゲッティンゲンで彼は今度はいくらか熱心に法律学に専念した。しかしクロッツとの交友の影響がここでもあらたに表れた。すなわち彼は、

クロッツの姑が棲む家に引き移り、この家で瞬く間に以前よりはるかに深い親交をえた。しかし、この関係は彼の勉学にも彼の暮らしぶりにも良い影響を与えるわけがなかったので、次第しだいに彼はゲッティンゲン滞在の本来の目的を見失っていった。事のすべてを聞き知った祖父は徐々に彼から手を引き、救いようのない孫への支援の手をすっかりひっこめた。ただし、後日幸運にも彼は自分の価値を分かってくれるすぐれた仲間と知己を得、次第に親密な友人関係を結んだ。その中には、いつも彼のお気に入りであったピースターがおり、ボイエ、フォン・キールマンスエッケ男爵、シュプレングエルらがいた。彼を支えてくれたこれらの実直な友人達がいなかったら、ビュルガーはおそらく本当に窮地に立っていたであろう。彼はふたたび古代文学の研究に専念した。この時期に詩句も作ったが、友人達は当時はまだ、彼が読んで聴かせたきわめて崇高な作品からひらめき光る天才の火花に気づかず注目もしなかった。しかしある時、彼はシュプレングエルの一室で催された会合で一晩を陽気に過ごし、うっかりフロックコートを置き忘れたことがあった。翌朝に彼は、おどけてはいるがしかし才気に富んだ書簡詩にしてこれを返してほしいと書いてやった。シュプレングエルはこの詩に多くの天才的なものを見いだし、また当時ビュルガーに高い評価をくだし始めていたボイエもまた、彼のその書簡詩がおそらく偶然の産物ではなく、そのうち彼はすぐれたことをなしうるであろうと思った。こんなことがあって彼は、試しに似たようなものを作ってみるよう激励され、そこで出来上がった次の作品が、彼によって初めて印刷された歌、
〈Herr Baccus ist ein braver Mann u.s.w.〉であった。この作品は、書き下ろされるた時のままの形で知られるようになった。

この時期、彼が友人達とともに共同で研究したのは古代及び近代のすぐれた模範であった。フランス人、イギリス人、イタリア人そしてスペイン人の作品が手本とされたが、そうした国民の言語を彼らはたいへん熱心に、そして一部は教師なしで学習した。ボイエがいまだに大切に保管しているのは、当時ビュルガーが賭けの

末スペイン語で書くことになった一篇の短編小説である。シェイクスピアは彼らのお気に入り
の手本であったので、彼らのサークルの中では
シェイクスピアの表現でのみ語られるのがつね
であった。彼らの内の何人かは、——その中にビ
ュルガーもいたのだが——ある時シェイクス
ピアの誕生日を公衆の前で大歓声で祝ったため、
監禁室で酔いを冷まさなければならぬ羽目とな
った。

フランスの手本に倣って教養を積み、当時す
でに世間に通じて作法もよかったゴッターは、
1769年の復活祭にボイエがゲッティンゲンにや
って来た時には詩人として公に認められていた。
両者の間には友情の絆が生まれた。フランスの
詩神年鑑と一緒に読んだ二人は、ドイツにも同
様の機関誌を創りたいと思い立ち、この考えは
直ちに実行された。その着想を彼らから伝えら
れたケストナーはそれに賛同し、実行を支援し
た。この二人の友人が寄稿したが、それは彼ら
の試作の中で不完全さのもっとも少ないもの
と思われた。また、残りのページには、すでにど
こかで印刷されたことのある、あるいは刷り本
のため散逸した古代詩人の作品をが充てられた。
1770年の詩神年鑑はこうして出来上がった。そ
れ以後の号では、ベルリン旅行を通じて文学上
の結びつきを増していたボイエが一人で編集の
仕事を果たし、ゴッターやビュールガー、次第に
彼の周囲に集まってきたすぐれた若者達、また
芸術の巨匠達に支えながら、彼はこの仕事を
1775年まで続けた。(中略)

ビュールガーは友人ボイエの軽快さと正確さを
羨み、この友人のそしりを受けながら修養を積
んだと自ら語った。そのためには書きたての作
品をそのままボイエの所に持って行き、彼の批
評に対して時には断固として防戦し、また出来
映えのよい作品に初めての喜びを感じた時には、
そこには誤りのひとつも見つからないと、しば
しば冗談をまじえて誓ったりした。ビュールガ
ーはこうしてこの友人のお陰ともいえる技術を学
んだ。またこの友達どうしの論じ合いこそが、
ビュールガーがますます求めて努力し、後に彼の
詩の長所として特徴づけられる、あの正確さの
基礎を置いたのである。私はしばしば彼の口か

ら、次のような考えを聞かされた。彼の言葉に
よれば、自分の詩的名声は非凡な才能のお陰と
いうより、むしろ多大な努力と、芸術作品を創
作するに際しての、永きにわたる倦むことのな
い推敲のお陰である。そこへ自分を駆り立てて
くれたのは、出来の悪いものでは十分とはい
いがたいと思える趣味のようなものである。それ
はしかし、たいていの凡庸な詩人たちの誤謬で
あって、彼らは自分たちの詩神のいかなる誕生
の時にも即座に惚れ合い、決してそれ以上の改
良を必要としたり、受け入れたりしようと思わ
ない。誰もが、正しい趣味をもって、自分と同
じくらいの努力を重ねるならば、凡庸な詩人た
ちでさえついには良い詩を産み出すことができ
るであろう。数々の自分の最良の詩は実際のと
ころ、修繕に際してもっとも多くの努力を要し
た、と。(中略)

後にビュールガーの精神に多大な影響を及ぼし
たパーシーの『拾遺集』は、この時期に彼の座
右の書となった。この頃成立したのは、〈das
Lied an die Hoffnung〉と〈die Nachtfeier der
Venus〉である。この翻訳をぎこちなく思ったボ
イエは韻文の模作を奨めたが、それは素晴らしい
出来映えで、ボイエだけでなくラムラーから
も高い賛同を得た。これはラムラーによってい
くつかの変更を受けたが、そうした修正のすべ
てに詩人が賛同したわけではなかった。が、こ
の翻訳はとにかくもまずは『文芸年鑑』(1773)
に、そしてその後ビュールガー自身の手によって
改作され、『詩神年鑑』(1774)に掲載された。
この時期に執筆された〈Europa〉は、文芸年鑑
の編集者には、この年鑑にあまり相応しくない
ように思われたため、個別に発表された。

はやくも1771年にビュールガーはゲッティン
ゲンにおいて詩人としての名声を博し、彼の手に
なるいくつかの機会詩には報酬が支払われ、印
刷され、そして忘れ去られた。彼の名声を聞き
及んだヘルティーは、ゲッティンゲンに来るや
否や彼の許を訪れたが、この青年がその素質を
いまだ十二分には伸ばしてはいないと見てと
ったビュールガーは、彼を自分の友人ボイエのと
ころへ連れていった。ミラーはヘルティーを通
じてこの両者との知己を得た。フォスや、シュ

ルベルク兄弟、そしてカール・フリードリヒ・クラマーもゲッティンゲンにやって来た。集団が形成されはじめ、この集団に属した個々のメンバーはその後のドイツ文学に多大な影響を及ぼし、またその一部はいまだに影響を及ぼし続けている。すでに名前の挙げた者たちや、文芸への愛着だけで彼らと結びついていた数人の他にも、この集団に属し、集う者たちが次第に現れた。ウルム出身のもうひとりのミラー。その早逝によってドイツ文芸が多くの損失をつたツヴァイブリュッケンのハーン。ライゼヴィッツ。やはりもうすでに他界した、ツヴァイブリュッケン出身のフォン・クローゼン。そして最後にシュプリックマン。この集団が持続性を得た時にはすでにビュルガーは田舎に居て、この集団と係わりをもったのは、ボイエ、ヘルティー、また彼の許にしばしば徒歩でやって来たクラマーを通じてだけのことであった。彼はヘルティーを評価し、特に歌謡詩人ミラーを賞賛し愛好した。詩歌の驚を自称したビュルガーは他の者たちを唄う小鳥たちとしか見なさなかった。(中略)

1772年、多くの困難の末にボイエは、偶然知己を得ていたウスラー家の人々がアルテン・グライヒェンの法廷における司法官の職務をビュルガーに委任したという知らせを持ってきた。たしかに詩人の友人たちは、この職務がそもそも彼にはまったく似つかわしくなく、活発な精神の持ち主であるこの男を満足させることも、快適に従事できるものでないこともよく見抜いていた。しかしビュルガーに選択の余地はなく、少なくともその職が目下の窮状に終止符を打ってくれるかに思われたのであった。そもそもこの職務は実際には、切迫する困窮からの逃避であり救済にすぎなかった。ビュルガーがそこに見出すはずであったものは、自己の精神を十全に展開させ傑作を産み出し完成するために必要な安定であった。その頃まだ彼には、自己の内部にそうした活動への力が十分みなぎっていると感じられた。このような落ち着きを得た後で、傑作をひっさげて世に登場し、もっと広い活動の場を自分に与えてくれそうな人々の注目を集めるはずであった。当時の状況にしたがえば、

この計画もあながちまずいものでもなかったかもしれない。だが司法官の職務は、彼が望んでいた快適な安定を与えることは決してなかったのである。

既に述べたように、あの善良な祖父は、計画性のない孫の生活ぶりを目にして、孫が有能に仕事をこなす男にはなれないと思い、手を引いていたのだが、孫が仕事に就いたことを聞いて和解し、ゲッティンゲンでつくった借金を支払い、孫が職に就く予定の頃合いに自らやって来て、家具調度の支度を援助し必要な敷金を支払った。しかし祖父はその金を孫に手渡すことにためらいをおぼえ、また孫の友人としてただひとり識っていたボイエが運悪く旅行中であったため、その金のある男の手に委ねた。ところがこの男自身もだらしのない男であった上に、用心深い老人さえも騙す器用さを持ち合わせていたため、後日この男を通じてビュルガーはその金の内から700ターラー以上を失うことになった。これがわれらが詩人の経済状態を悪化させる最初の原因をつくった。悲しいことに、その状態は死ぬまで続き、おそらく彼の詩的・文学的側面にも悪影響を及ぼしたのである。

ビュルガーが田舎で過ごした最初の冬に、さまざまなひらめきの火花が生まれた。『拾遺集』の中から依然として彼の内部で微光を発せられていたそうした着想の火花は、ヘルダーの『ドイツの芸術と特性について』によって新たな精気を吹き込まれた。かつて彼は、月明かりの中で農夫の娘が次のように歌うのを耳にしたと何度も語った。

Der Mond der scheint so hell.

Die Todten reiten so schnelle:

Feins Liebchen, graut dir nicht?

この歌詞がたえず耳の中で響き彼の想像力に働きかけたので、彼はその数カ月後に『レノーレ』の数節を素早く起草した。彼がそれをボイエに伝えたと、ボイエはいたく魅了され、作品が仕上がるまでは休息を与えないほどであった。この完成にはもちろんたいへんな時間を要した。ずっとまとまりを持たなかった詩節が、最後には一本の糸として寄り合わされ順序よく並べられた。ビュルガーはこのバラードの原典である

イギリスの歌についてほんのわずかを知っているにすぎなかったし、ドイツのかなりの地域でいまだ民衆の口に生き生きと歌われるものがその一部であるにちがいないこの古歌謡について折にふれいたところで問い合わせてはみたがつねに徒労に終わった。また、イギリスの類似のパラードがゲッティンゲンの図書館でも見つけられなかったならば、その分野の同所の宝物を熟知している友人ボイエの目にとまることも難しかったであろう*)。——たいへん有名になったこの詩はまず最初にゲッティンゲンの文学サークルにおいて十分な成果をおさめ朗読された。その際、

Rasch auf ein eisern Gitterthor
Ging's mit verhängtem Zugel,
Mit schwanker Gert' ein Schlag davor
Zersprengte Schlos und Riegel.

という箇所にしたった折りにビュルガーが乗馬用の鞭で部屋の扉を叩くと、ひどく驚いたフリードリヒ・シュトルベルクが椅子から跳び上がった。それまであらゆる慣習的形式から逸脱した詩の運命に不安を抱いていたビュルガーは、今やみずからすぐれたものを創り出したように思った。また、詩神年鑑の印刷が済んでまもなく故国へ旅行したビュルガーはその途路で、自分が寝ている寝室に隣り合った農夫の部屋で、教師が彼の『レノーレ』を朗読し、田舎の聴衆が大声で喝采するのを耳にして喜んだ。しかしこの詩は、もっと教養の高い公衆の注目をも集め、原作者にたいし少なからぬ高名をもたらしたが、それはドイツのさまざまな地域から届いた無数の手紙が証明している。

職務に携わる以外の余暇と余力を、もっとふさわしい活動の場を提供してくれる作品を産み出すことに使うことができたなら、ビュルガーもまだ結婚する必要はなかったであろう。彼みずからもそのことを確信していたが、一年もたないうちに、ハノーファー近郊ニーデックの官吏レオンハルトの娘たちの一人にとっても強く惹かれ、自分の決心など性急に忘れたあげく、善良で寛大なこの女性に求婚し、1774年9月、彼女と婚姻の契りを結んだ。

すでに以前からビュルガーは、宮廷顧問官リ

ステ夫人の完全な狂気に近い悲惨な情性疾患と、その夫との間で起こっていた不和がきっかけで、ほとんどの時間をニーデックで過ごし、法廷が彼の臨席を要請するときにだけゲリーハウゼンに戻っていた。そこで彼は、裁判管轄区域内にある村ヴェルマースハウゼンを将来の居住地として選び、一軒の農家に自分の住居をしつらえ、若妻を伴ってそこに引き移った。

ボイエとドームが1776年から刊行を開始した『ドイッチェス・ムゼウム』第1号は、ヤンプス（短長格・抑揚格・弱強格）で書かれた『イーリアス』の第5巻で始まっている。原典の詩行形式での翻訳はドイツ語では成功しないと当時みずから考えていたビュルガーは、この試みを通じて、彼の手になるかかる作品が受け入れられるか否かを読者に問うたのである。この着想にビュルガーはすでに何年も前から取り組んでいた。彼の友人たちの何人かは、新しいものを作り上げた方がよいと忠告したが、多くの者たちはこのギリシャ詩人のドイツ化を続行するようにと彼を励ました。彼にとってもっとも決定的だったのは、ヴァイマルのゲーテから下された要請であった*)。この要請にしたがって彼は執筆を続け、『イーリアス』の数巻を仕上げたが、完成には至らなかった。ひょっとすると、彼みずからがヤンプスの卓抜さに疑念を抱いたのかもしれない、あるいはその時また予告されたシュトルベルクの翻訳によって冷水を浴びせられたのかもしれない。ビュルガーは、この競争相手のすぐれた才能と力を高く評価してはいた、しかし彼が恐れをなしてコースから外れたのではなく、怒りをもってこの友人に挑戦の手袋を投げつけたのである。フリードリヒ・レオポルト・フォン・シュトルベルク男爵がその手袋をととても親しげにかつ上品に彼に返すと、彼の怒りは直ちに鎮まった。その後ビュルガーがヘクサメターとも和解したことは周知のことである。(中略)

1775年には、ハレの寄宿学校で共に過ごしたゲッキングとの交友が新たに始まった。この交友は後日もっとも親密な友情となり、ビュルガーの死まで続いた。

1777年、ボイエの要請を受けたビュルガーは、

当時シュレーダーがハノーファーで舞台にかけようとしていた『マクベス』の魔女の場面をドイツ語に翻訳した。この哲学的な役者との友情あふれる交友はこの好意が生んだ結果であった。その直後に彼の義父レオンハルトが亡くなった。すると今や、家政や家族や遺産などの要件を片づけなければならない重荷が詩人にふりかかり、傑作を産み出す暇も余力もまったく失われることになった。しかしながら彼は、この死がもたらした厄介な訴訟を巧みに遂行することで、法律の知識も、それを適用する能力も自分に欠如していないことを証明して見せた。

さてしかし、家族が増えるにつれ、それに伴って収入が増したわけではなかったの、彼の窮境は悪化した。そこでビュルガーはこの状況の改善を徐々につよく願いはじめた。彼は、義父の後継として自分よりはるかに収入の多いニーデックの官職に就くことを望んだが、あらゆるとりなしにもかかわらず、この希望は実現されなかった。

1778年ビュルガーは『ゲッティンゲン詩神年鑑』の編集を引き受けた。それまでの編集者であったゲッキングがフォスに協力してハンブルグの年鑑を担当することになったためである。この仕事を引き受け、フォスやゲッキングと結びついたことを理由にわが友人ビュルガーは非難を浴びた。しかし彼はこの非難をみずから打ち破った。

その同じ年に彼は処女詩集も出版した。この『詩集』には、年鑑や新聞にすでに印刷された詩の他にさまざまな新しいすぐれた詩篇が含まれていた。この詩集によってたしかに詩人としての彼の名望ははるかに確固としたものになったが、もっとよい職に就きたいという希望は叶えられなかった。かつて彼はいささか大胆な決心をして、フリードリヒ2世に宛て手紙を書き、プロイセン王国の中で自分の能力にふさわしい職を王に嘆願したのだ。偉大なる王はただちに宰相にそれを考慮するようにと命じた。すると

その宰相はわれらがビュルガーにとっても丁重な書面で、貴殿にぴったりの職を喜んで差し上げたいとは存じますが、かかる職は目下のところ空きがございません、それゆえもう暫くのご辛抱を願います、と知らせてきた。いずれにしてもビュルガーの希望は実現されなかった。おそらくその理由は、彼が好機にふたたび照会することを怠ったからである。

当面の経済状態を改善するために、また自分とやさしい妻がもっと快適な生活を送れるように、アッペンローデに賃借していた小作地を買い取る決心がなされた。彼は1780年にその地に足を踏み入れたが、しかしそこで高収穫が望めないなどと彼には予測できていなかった。なぜなら、彼自身も彼の妻も、農業に関する本格的な素質など持ち合わせていなかったし、農作業を有益な方法で実行する十分な知識と経験も持っていなかったのである。それに加えてその後さらにいろいろな災害が起こった。結局のところ、まもなくして彼はこの収益手段を断念し、1783年にはその小作地の賃借契約を破棄せざるをえなかった。この企てに際して彼がその3年間に注ぎ込んだ資金の金額は数千ターラーにのぼった。

注

Einige Nachrichten von den vornehmsten Lebensumständen Gottfried August Bürger's nebst einem Beytrage zur Charakteristik desselben. Von Ludwig Christoph Althof. Doctor und Professor der Arzneiwissenschaft in Göttingen. Göttingen, bei Johann Christian Dieterich, 1798.

Gottfried August Bürger's sämtliche Schriften. Herausgegeben von Karl Reinhard. Vierter Band. Vermischte Schriften. Zweiter Theil. Göttingen, bei Heinrich Dieterich. 1802.